

## 文學博士宇野圓空著「マライシヤに於ける稻米儀禮」

### に對する授賞審査要旨

本書は稻作米食を生活の基調とせる一文化圏としてマライシヤ民族に就て、その稻米儀禮を精査して、行事の實相を確め、意義を尋ねたるものにして、宗教學民族學に於ける重要な一方面を開拓したるものなり。

本書は序説、集録、理論の三篇より成る。

第一篇序説は、先づ著者がマライシヤと稱する地域を限定する意義を説明し、その間に生息する民族の體質、言語、生活、習俗等に依りて、諸民族の相互關係、移住變遷、文化程度につきて分析し總合して、新舊マライ人種の別を立て、以て研究の目標を批判的に定め、進んでその宗教を觀察せり。即ち、外來宗教を奉ずる所謂の新マライ人にも、根柢には元來の民族的信仰の率として抜くべからざるものあるを説明し、稻米儀禮がその生活文化の重要要素なることを明かにせり。次に稻作、貯藏、米食等に關して、その種別過程の複雑なる點を一々分析彙類し、此等が民族の生活に密着して、其等に關する儀禮が極めて重要な行事なることを解説し、以て儀禮研究の前程となせり。

第二篇集録は、汎く諸種の文獻を涉獵し、又著者自身の現地踏査に基きて、五百に近き實例を擧げ、

開墾、種播、植付、發育、成熟、收穫、食用、咒法の用途等につきて、一々の習俗を檢查し、其間に  
行はるゝ儀禮につきて、行事、觀念、聯絡を闡明せり。此篇に於ける著者の努力は、各國、特に多く  
オランダ學者の此等に關する論文、報告、雜記等を蒐集整理するを手始めとせり。由來此等の文獻記  
事には、只見聞視察を記したる雜駁又斷片的なるもの多く、従つて混雜支吾の點少からず、研究材料  
として適當ならざるものあり。著者は學術的批判を施しつゝ、此種の材料をも自在に使用せるのみな  
らず、弘く博物館の蒐集につきて視察し、且つ數次に互る現地調査に依りて、實相を糺し、曖昧を拂  
ひ、誤を正し、又他民族との比較によりて之を補ひ、以て萬般の行事につきて實相を確めんとせり。  
その斷案は概ね穩當又的確と認むべく、細目に關しては異論の餘地なき能はざるべきも、著者を凌駕  
すべき材料を提出して異説を確立せんことは、何人にとりても容易の業にあらざるべし。茲に第二篇  
に於て著者が扱へる事項の幾分を列舉するのみにても、その勞作の價値を示す指數たるに足るべし。  
即ち開墾の季節、耕地の選定、伐木燒立、水盛、種播の季節、植付の行事、草取、雨乞、虫とり、成  
熟期の行事、收穫の儀禮、食用の儀禮、咒法の用途、農具及米粒の神聖等、あらゆる方面に互りて儀  
禮の段取方法と共に、地方的異同を擧げて、一々その實相を明かにするに努めたり。

第三篇理論は、上記事象につきて、その社會的竝に宗教的意義を尋ね、行事に参加する者の意識の  
差異を考慮しつゝ、信仰觀念の内容を闡明し、又諸行事の間に存する關聯脈絡を指摘せるものなり。

即ち在來、學者間に於て儀禮を直に宗教とする者ある説を正して、社會的行事と神聖觀念との異同を論究し、特に祭祀儀禮に於ける集團につきて、その性質の複雑にして又變遷あるを究明し、就中稻米儀禮と女子執行者との密接なる關係を示し、母權制度の意義を明かにせる等、注目すべきものなり。續いて稻米の神聖、稻魂と諸變異との關係、屠宰、供犠、饗宴の聯絡竝に異同、稻米儀禮の動機、目的、發生、變遷を究明し、最後にマライシヤの文化全般に關する觀察を以て之を結べり。

以上敘し來たりし諸方面を總括するに、著者は材料の蒐集とその批判的穿鑿より進みて、マライシヤ民族の生活に於ける稻米儀禮の意義を討尋し、その文化圏の系統範圍、竝に文化層の構造聯絡を總的に闡明せるは、宗教民族學上の顯著なる功績といふべし。その材料論點は必ずしも著者の獨得にあらざるも、比較研究、批判論究、竝に總合的見地に於て、此論題に關する在來の研究を凌駕せるを見る。臺灣高砂族はマライシヤに屬すべきも、著者は別にその研究を成せるを以て、本書に之を除きたるは實質上の缺陷とはならざるべし。又稻米儀禮一般を研究するものとせば、マライ以北東南アジア大陸の諸民族にも及ぶべきはずなるも、著者は多少此等にも觸れしのみにして、此を別途に扱はんとせるは、稍々不足の感あるも、マライシヤを一團として扱はんとする爲には已むを得ざる事なるべし。かくて、著者の此研究は、一定の文化圏に於ける稻米儀禮を研究せるものとして、重要なる一面の開拓を成就せるものなり。而して將來、著者又は他の學者が東南アジア諸民族全體に互りて、稻

米儀禮竝に關聯事項を研究するに對して、墾田の一角を開き、他日全面の耕作收穫に進むべき嚮導をなせるを見る。又從來此方面の研究は、麥食民族なる西洋學者の手に成りて、視察論點が核心に入らざる憾あるに對して、著者は、自身米食民族の一員として、自身の生活體驗と接觸探求とに基づきて此研究を大成し、他人事ならぬ心地を以て其内容を充實したるは、研究の方法及成績と相竝びて、特に記すべき長所として推賞すべきを見る。

著書 宗教民族學 昭和四年十二月

宗教の史實と理論 昭和六年七月

宗教學 昭和六年九月

論文 稻の靈魂について（宗教研究、新五卷、三號） 昭和三年五月

人身供犠と首狩の發生（宗教學論集） 昭和五年五月

農耕文化の宗教學的特徴（日本民族） 昭和十年十一月

日本原始宗教（日本文化史大系、第一卷） 昭和十三年三月

齋穗と齋田の諸形式（神道研究、二年一號） 昭和十六年二月

東亞民族精神と農耕文化（教學叢書、第十輯） 昭和十六年三月